

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

読書の楽しみや効用について、私はこれまでも繰り返して語ってきました。

いつの時代も、読書は素晴らしいものです。思考力を伸ばし、想像力を豊かにし、苦しいときも前進する力をくれる。自己を形成し、人生を豊かにするのに欠かせないのが読書です。その価値はずっと変わらないのですが、あえて「いまこそ」と言いたいと思います。

「本を読まなくなった」とはずいぶん前から言われていることです。もう耳にタコができていてという人もいます。

1 ^a耳が痛いというならまだいいですが、「それがどうかしましたか？」と聞き直っている人があまりにも多い印象です。

先日、¹恐ろしいデータを目にしました。「読書時間ゼロ」の大学生が過半数を超えた、というものです（第53回全国大学生生活協同組合連合会による学生生活実態調査。53・1%が1日の読書時間を「ゼロ分」と回答）。

大学で教鞭^{きょうべん}をとっている者としてうすうすわかつていたことですが、数字を見るとやはりシウウゲキ^①でした。理系の学生が本ではなく論文を読んでいて、実験や計算に多くの時間を使っているというのならまだ理解できますが、文系の学生も本を読まないというのですから驚きです。

2 実際、本を読まずに、何をしているのでしょうか？

読書をしていないとはいっても、文字を読んでいないわけではありません。むしろ、大量に読んでいる。その多くはインターネットだったり、SNSだったりするわけです。

「本を読まなくても、ネットでいいじゃん」と言う人はいるかもしれませんが。

「すべてネットの中にあるではないか」と言われれば、まあ、その通りです。毎日膨大な量の情報が追加されているネット上には、最新のニュースだけでなく、I東西のあらゆる物語や解釈や反応が含まれています。ネットの「青空文庫」では、著作権の切れた作品を無料で読むこともできます。

3、わざわざ本を読まなくてもネットでいいじゃないかという意見も見当違いなものではありません。

4、ネットで読むことと読書には重大な違いがあります。それは「向かい方」です。

ネットで何か読むというときは、そこにあるコンテンツにじっくり向き合うというより、パッパッと短時間で次へいこうとします。より面白そうなもの、アイキャッチ的なものへ視線が流れますね。ネット上には大量の情報とともに気になるキャッチコピーや画像があふれています。それで、ますます一つのコンテンツに向き合う時間は短くなってしまふ。

最近音楽もネットを介して聴くことが多くなっていますが、ネットでの「向かい方」ではイントロを聴いていることができません。^②ガマンできなくて次の曲を探しはじめてしまいます。そこで、いきなりサビから入るような曲のつくり方をしているという話を、あるアーティストの方から聞きました。

現代人の集中力が低下していることを示す研究もあります。2015年にマイクロソフトが発表したところによると、現代人のアテンション・スパン（一つのことに集中できる時間）はたった8秒。2000年には12秒だったものが4秒も縮み、いまや金魚の9秒より短いと言います。²

これは間違いなくインターネットの影響でしょう。とくにスマホが^③フキユウして、スマートフォンで常にいろいろな情報にアクセスしたり、SNSで常に短いやりとりをしたりするようになったことで、ある意味で「適応」した結果です。

このようにネット上の情報を読むのと、読書とは行為として全然違います。

ネットで文章を読むとき、私たちは「読者」ではありません。^{II}者^④なのです。こちらが主導権を握っていて、より面白いものを選ぶ。「これはない」「つまらない」とどんどん切り捨て、「こっちは面白かった」と消費していく感じですよ。

消費しているだけでは、積み重ねができません。^bせわしく情報にアクセスしているわりに、どこかフワフワとして何も身についていない。そのときは「へえ」と思ったけれど、すぐに忘れてしまいます。浅い情報は常にいくつか持っているかもしれませんが、「人生が深くなる」ことはありません。

これは情報の内容やツールの問題というより、³「構え」の問題です。

著者をリスペクトして「さあこの本を読もう」というときは、じっくりと腰を据えて^④話を聞くような構えになります。著者と二人きりで四畳半の部屋にこもり、延々と話を聞くようなものです。ちよつと退屈な場面があっても簡単に逃げるわけにはいきません。辛抱強く話を聞きます。

相手が天才的な作家だと、「早く続きが聞きたい」と言って寝る間も惜しんで読書をすることもあるでしょう。しかしドストエフスキーと二人きりになって3か月も話を聞かされ続けたりしたら、大概の人は逃げ出したくなります（やってみると最高なのですが）。⁴実際、みんな逃げ出しつつあるわけです。

逃げ出さずに最後まで話を聞くとどうなるか。それは「体験」としてしっかりと刻み込まれます。⁵読書は「体験」なのです。実際、読書で登場人物に感情移入しているときの脳は、体験しているときの脳と近い動きをしているという話もあります。

体験は人格形成に影響します。あなたもきっと「いまの自分をつくっているのは、こういう体験だ」と思うような体験があるでしょう。

辛く悲しい体験も、それがあつたからこそ人の気持ちがわかるようになったり、それを乗り越えたことで強さや自信になったりします。大きな病気になったり命の尊さを感じる出来事があれば、いまこの瞬間を大事に思えるようになるなど、人格に変化をもたらします。

自分一人の体験には限界がありますが、読書で疑似体験をすることもできます。

読書によつて人生観、人間観を深め、想像力を豊かにし、人格を大きくしていくことができます。

読書よりも実際の体験が大事だと言う人もいます。実際に体験することが大事なのはその通りです。でも、私は読書と体験は矛盾^⑤しなく考えています。本を読むことで、「これこれを体験してみたい」というモチベーションになることはありますし、それ以上に、言葉にできなかった自分の体験の意味に気づくことができます。

実際の体験を何十倍にも生かすことができるようになるのです。

(齋藤孝『読書する人だけがたどり着ける場所』による)

問一 〓 ① 〓 ⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書^{かいしょ}で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 〓 4 を補うのに最も適切な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ですから イ では ウ つまり エ なぜなら オ しかし カ それで

問三 〓 a・bの意味として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 耳が痛い ア けなされて腹が立つ。 イ よく聴いて心にとどめる。

ウ 言われ続けてあきる。 エ 弱点を突かれてつらい。

b せわしく ア いそがしい様子。 イ 慎重に行う様子。 ウ 手際がよい様子。 エ 範囲が広い様子。

問四 〓 1 「恐ろしいデータ」とありますが、筆者はなぜ恐ろしいと考えたのですか。説明しなさい。

問五 Ⅰ に、「むかしからいままで、あらゆるところ。」を表す四字熟語「〇〇東西」となるように、正しい漢字二字を入れなさい。

問六 〓 2 「これ」とは何を指していますか。文中から十六字の表現で抜き出しなさい。

問七 Ⅱ を補うのに最も適切な言葉を、文中から漢字二字で抜き出しなさい。

問八 〓 3 『構え』の問題です。」について、ネット上の情報を読むときと、読書するときでは、「構え」にどんな違いがありますか。

文中の表現を用いて説明しなさい。

問九 〓 4 「みんな逃げ出しつつある」とは、「みんな」がどうなっていることを例えていますか。説明しなさい。

問十 〓 5 「読書は『体験』なのです。」とありますが、筆者は、読書の体験が人格にどんな影響をもたらすと考えていますか。それがわかる五十字程度の一文を抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。その際、句読点も字数に含めます。

二

これは、青山美智子『赤と青とエスキース』の一節です。美大を出た「僕」は、村崎^{むらさき}さんが一人で額縁^{がくぶち}の製造や販売を行っていた「アルブル工房」に就職して八年になります。ある日、画廊^{※1}から絵の額装の依頼があり、作品リストを見た「僕」は驚きました。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

『エスキース』ジャック・ジャクソン オーストラリア 水彩

記憶の海から、ふかりと姿を見せたその名前。

ジャック・ジャクソン？

僕は胸をふるわせながら、まだ作業台の上にある円城寺画廊の作品を確認しに行った。

厚紙に貼られたラベルを確かめる。『エスキース』これだ。白手袋をはめ、そつと厚紙を開くと、薄紙の下から赤い服を着た若い女の子が現れた。

長い髪のしなやかさ、光を受けた輝きの表現技法。そのタッチを見て僕は涙が出そうになった。

ジャック。¹ああ、ジャックだ。ここでやつと会えるなんて。

——大学三年生の春休み、安いツアーがあるから一緒にメルボルンへ行こうと誘ってくれたのは次郎だった。

アートにあふれた街、メルボルン。壮観なグレート・オーシャン・ロードや、フィリップ島のペンギン。僕たちは旅行代理店が企画した四泊六日のツアーに乗っかり、駆け足で観光地を回って楽しんだ。

そのうち一日だけ、フリータイムがあった。市内散策。僕と次郎は、あえて別行動をとることにした。

ビクトリア国立美術館をメインに、僕はひとりで街を練り歩いた。

壁にはカラフルなウオールアートがペイントされている。自由に「落書き」していいエリアだけど、あまりにもクオリティが高い。道路にチョークで直接絵を描いている人の姿も見かけた。本当に街中がキャンバスみたいだ。

建物の一角のドアが開いていた。ちよつとのぞくと、画材屋のようだった。僕はそこに入ってみた。

恰幅^{かつぷく}のいいおじさんがレジにいて、その脇ではくせつ毛の青年が椅子^{いす}にちょこんと座っていた。僕と目が合うと、彼は親し気な笑みを見せた。初めて会うのに。つられて僕もほほえみ返す。

彼の前には小型のテーブルがあり、画用紙や絵の具が乱雑に置かれていた。絵を描いているというよりは、画材をそこで試せるようになってい²るらしかった。

すぐそばの壁に、一枚の水彩画が飾られていた。濃紺^{きんぎ}の地に透き通るような青で描かれた、細長くて華奢^{きゃしゃ}な三角のタワー。塔の裾^{すそ}はスカートのように優雅に広がっている。

僕は心を奪われた。

目も胸も両手両足も、見た瞬間に体ごとその絵に吸い込まれていきそうで、そんな想いをしたのは初めてのことだった。

なんて美しい青だろう。その中にたたずむ、繊細^{せんさい}でありながら力強いタワーの筆致^{ひつち}。胸の奥を強く揺さぶられるような、そしてそのあと穏^{おだ}やかに鎮^{しず}ま^っていくような……。

本当に魅力的な作品だった。いつまでもいつまでも、ずっと見ていたかった。

僕がその絵を見ると、ジャックが椅子に座ったまま英語で言った。

「僕が描いたんだ」

英語はあまり得意じゃないけど、そんな意味だということはわかった。

絵の下に「Jack Jackson」と手書きされた紙が貼られていた。

ジャック・ジャクソン。印象的な名前。

「きれいな絵だね」

僕は短くそう言った。ビューティフルだかフアンタスティックだか、語彙^{ごいりご}力のなさからそんな言葉しか出なかった。ちゃんと伝えられな^いのが悔しいくらい、ほんとうに、それは素晴らしかった。水彩のふんわりした世界観を活かしつつ、塔の鋭い輝きがくつきりと表現されていた。

「アーツ・センターのタワーだよ」

彼は椅子から離れ、僕の隣に立った。そうして見ると、彼は思ったよりコガラ^{※2}だった。そんなに背が高いわけではない僕を、ちよつと見上げるようにして笑いかけてくる。

アーツ・センターという名前をキャッチして、僕は持っていた地図を見た。

さつき、まさに目の前を通ってきたはずだ。劇場やシアターのフクゴウ施設^{※3}で、その建物の上にはたしかにこんな塔があった。

でも僕が見たそれは、青ではなく白だったと思う。アーツ・センターのタワーはメルボルンのシンボルになっていると、ガイドブックにも書かれていた。遠くからでも見えるので、それを目印にして歩いたのだ。

何と言え^ばいいのかわからなくて僕がじつとその絵を見ていると、ジャックは言った。

「夜になると、こんなふうに青くライトアップされるんだ」

そうか、これは夜景なんだ。

優しい夜の中で、しゃきつとそびえたつ青白い塔。そのメリハリの美しさに、僕はあらためて目を引かれる。筆で描いたにしては、その塔はあまりにもシャープだった。

「どうやって描いたの」

僕が訊ねると、ジャックは嬉しそうに「見てて」と椅子に座りなおした。

パレットに青い絵の具をしぼり、水を含んだ筆を落とす。画用紙の一部にたつぷり青を塗ると、彼は筆を置いた。そして別の画材を持ち直す。

ペインティング・ナイフ。

ジャックはひし形のナイフの先を青に走らせた。シャツと音がして、真っ白な細い線が現れる。僕は思わず「おお！」と叫んでしまった。

※³「スクラッチ、スクラッチ……」

歌うようにつぶやきながら、ジャックは何度もナイフを操る。とても気持ちよさそうだった。

青の中に、網目のように刻まれた白。乾いてからそこにまた薄く青をのせてにじませたり、部分的にそのまま残して白を活かしたりして、あの絵を制作したらしい。

彼はペインティング・ナイフを使っていろんな技法を見せてくれた。

刃の側面に絵の具をつけてすべらせるとすーっとしたみずみずしい直線ができたし、水をたらしたところにナイフの面をぺたぺた押し付ければ、予期せぬ色ムラができておもしろい。

美大で油絵を専攻していた僕にとって、ペインティング・ナイフは馴染み深い道具だった。だけど絵の具を立体的に創り込んでいく油絵の画法とは別に、水彩の場でもこんなふうにいるんな活躍をするなんて。

「やってみるかい？」

ジャックが顔を上げた。僕はうなずく。

何色でもいいと言われたので、僕は絵の具箱の中から迷わず赤を選んだ。³

画用紙の隅に作った赤いスペースに、僕もペインティング・ナイフをあてた。

シャッ。小気味よい手ごたえが伝わってくる。高揚感に満たされて、僕もジャックの真似をしてつぶやいた。スクラッチ、スクラッチ。

「日本にもね、こんな塔があるんだ。赤い東京タワー」

僕は手早く三角形を描き、簡易的な東京タワーを示して見せた。ジャックにそれを教えたくて、僕は赤い絵の具を選んだのだ。

オウ、とジャックは目を輝かせた。

「僕も東京タワーを見てみたい。日本にはまだ行ったことがないけど、すごく興味があるよ。日本人の友達もいるんだ」

それからジャックと僕は、1と、ジェスチャー混じりでお互いのことを話した。店には他に客もいなくて、レジの中にいる店主らしき男性は新聞のクロスワードパズルに興じていた。

ジャックはいろいろなアルバイトをしながら絵を描いていると言った。この画材屋も職場のひとつだ。最近、コンクールに出品した絵が小さな賞を獲り、数はまだ少ないけれど作品の依頼がくるようになったという。彼と僕が同じ二十一歳だと知ったときには、ふたりで小さく盛り上がった。

だけどひとつだけ、僕には納得のいかないところがあった。

彼のアーツ・センターの絵は、くすんだ銅色のチープな額縁に収まっていた。上部中央にハート形のパーツがひとつ、所在なさげにくっついている。^④廃棄寸前の適当なものが使いまわしされているとしか思えなかった。

古ぼけたそのフレームをあらためて見て、僕はやるせない気持ちになった。憤りさえ感じた。この素晴らしい絵が、どうしてこんな目に遭わなきゃいけないんだ？

この絵には、これよりもふさわしい額縁があるはずなのに。

もっともっと、大切に扱われるべき作品なのに。

「このフレームは？」

僕が控え目に質問すると、ジャックはちよつと苦笑した。本人も気に入ってはいないらしかった。

「店の倉庫にあったのを使わせてもらってるんだ。僕の絵が、ずっと居心地よく過ごせるようなフレームと出会えたらいいんだけど」そこに数人の女性客が入ってきて、早口の英語で店主と話し始めた。ジャックも店主に呼ばれて、何か込み入ったことを相談されている。

腕時計を見ると、次郎との待ち合わせ時間が迫っていた。もう行かなくてはならない。

困ったような顔で話し込んでいるジャックに声をかけるのも申し訳なく、僕は後ろ髪を引かれながら店を出た。

ジャック・ジャクソン。その名前を僕は頭の中で復唱した。何度も。

帰国後、僕はあの絵がどうしても忘れられなかった。そしてそれとセットのように、あの額が思い出されるのだった。⁴彼の絵の魅力をもっと引き出せるような額をつけてあげられたらいいのに。小さいころからずっと絵が好きだったけど、額縁の「存在」をこんなにちゃんと認識したのはそのときようやくのことだったかもしれない。

大学では、額装に関するちゃんとした授業なんてなかった。自分で描いた作品も、キャンバスのまま壁にかけるとのほうが多かった。額縁に強い興味を持った僕は片っ端から美術館に足を運び、じっくり見て回った。どんな額だったらジャックの絵に合うのだろう。額職人はどんなふうに絵に額を添わせてきたのだろう。そうしているうち、いつしか、絵よりも額に夢中になっていた。

額職人によって手掛けられたそれらはふたつとして同じものはなく、それぞれに、それぞれの表情があった。フレームの太さ、厚み、形状、色合い。施された彫刻や模様。額縁が違えば絵の印象もまったく違うだろう。しかし不思議なのは、いくらゴウカ^⑤絢爛な作りの額縁でも、やはり目がいくのは絵のほうだということだった。

でもそれは錯覚かもしれない。僕たちは絵に魅入られながら、確かに額縁も見ているのだから。出しゃばらずに絵を引き立てる、見事な調和。芸術的でありながら、密かに計算されつくしている。おもしろい。

額縁を、作ってみたい。僕がいつか、この手でこんなふうに額装を手掛けてみたい。そんな想いが2と湧いていた。

そして就職活動の末「アルブル工房」にたどりつき、僕は額職人をめざすことを決めた。ジャックの絵との出会いが、僕に絵から額へと舵を切らせたのだ。

僕には予知能力はないけれど、大きな確信があった。ジャックは間違いなく、画家として大成する。あんな絵が、あんな人が、あそこで埋もれたままのはずはないと思った。

ジャックが立派な画家になったときには僕も、胸を張って額装を引き受けられるような熟練の額職人でありたい。確かにそう思ったんだ。そのときは――。

裏口から村崎さんが戻ってきた。

案の定、流木を小脇に抱えている。作業台の前で呆然として僕を見て、怪訝な顔で近づいてきた。

ジャックとはあれから会うこともなかったし、『エスキース』というこの絵がいつ描かれたものなのかもわからない。でも彼はもう、こんなふうには日本の画廊で大切に扱われるほどの画家になったのだ。

「村崎さん……」

「ん？」

「僕に……僕に、この絵の額装をやらせてもらえませんか」

村崎さんは、無言のままちよっとだけ口を開けた。目を丸くして。

「……ジャックと……この絵を描いた画家と、一度だけ会ったことがあるんです。彼の絵を見て初めて僕は、額縁に興味を持ったんです」

僕が事情を話すと、村崎さんは少しの間のあとにうなずいた。

「⁵わかった。ひとりで好きなようにやってみろ」

ひとりで。その言葉の重さに、自分で申し出ておきながら僕はあらためて息を呑んだ。村崎さんは無表情のまま続ける。

「おまえだけで最後までひと通りこなせるくらいには、教え込んできたつもりだよ」

「……ありがとうございます！」

胸の中に、入道雲みたいに **3** と制作意欲がふくらんでくる。

⁶メルボルの画材屋の扉はまだ、僕に向かって開いていてくれたのだ。きつと。

※1 画廊……絵画などの美術品を陳列し、客に見せる所。

※2 エスキース……下絵。

※3 スクラッチ……ひっかくこと。

問一 ―― ① ⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 **1** **3** を補うのに最も適切な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア むくむく イ ふわふわ ウ ぽつぽつ エ ぼそぼそ オ ふつふつ カ めらめら

問三 ―― a・bの意味として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a やるせない ア 悲しみにくれる。 イ 心が晴れない。 ウ 後悔し続ける。 エ 動揺を隠せない。

b 怪訝 ア 元気がないのを心配する。 イ 予想が外れてがっかりする。 エ 働かないのをとがめる。

問四 ―― 1 「ああ、ジャックだ。ここでやつと会えるなんて。」とありますが、「僕」にとってジャックはどんな存在ですか。それについて述べた次の文のへ 1 ～へ 4 へに入る最も適切な言葉を、それぞれ指定の字数で抜き出しなさい。

美大でへ 1 二字を専攻していた「僕」は、メルボルンでジャックと彼の作品に出会ったことがきっかけで、へ 2 三字をめざそうと決めた。工房に就職した「僕」は、ジャックがへ 3 二字として大成したときに、彼の作品のへ 4 二字を引き受けられるようにになりたいと思っていた。

問五 ―― 2 「濃紺の地に透き通るような青で描かれた、細長くて華奢な三角のタワー。」について、ジャックはどのようにしてこの絵を制作しましたか。文中の表現を用いて説明しなさい。

問六 ―― 3 「迷わず赤を選んだ。」とありますが、「僕」が赤い絵の具を選んだのはなぜですか。文中の表現を用いて、二十字以内で説明しなさい。その際、句読点も字数に含めます。

問七 ―― 4 「あの額が思い出されるのだった。彼の絵の魅力を……」について、次の問いに答えなさい。

① 「あの額」とは何を指していますか。文中から十三字の表現で抜き出しなさい。

② 「彼の絵の魅力をもっと引き出せるような額」について、「僕」はそれを、どんなものだと考えるようになりましたか。文中から、四十字以上、四十五字以内の表現で抜き出し、その最初と最後の五字ずつを抜き出しなさい。その際、句読点も字数に含めます。

問八 ―― 5 『わかった。ひとりで好きなように……あらためて息を呑んだ。』とありますが、このときの「僕」の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

問九 ―― 6 「メルボルの画材屋の扉はまだ、僕に向かって開いていてくれたのだ。」とは、どんなことを表していますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア かつて「僕」がジャックの絵を見るきっかけとなった偶然の出会いが、今度は「僕」と村崎さんを結びつけてくれたということ。
イ かつて「僕」が画家をやめる理由となった偶然の出会いが、今度は「僕」の目標としていた事を思い出させてくれたということ。
ウ かつて「僕」に職人としての誇りを教えてくれた偶然の出会いが、今度は芸術家の想いを「僕」に気づかせてくれたということ。
エ かつて「僕」の進路決定のきっかけとなった偶然の出会いが、今度は職人としての「僕」に挑戦の機会を与えてくれたということ。